



Title	大学院生を対象とした大学教員養成プログラムに関する研究
Author(s)	根岸, 千悠
Citation	大阪大学, 2026, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/105383
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (根 岸 千 悠)

論文題名 大学院生を対象とした大学教員養成プログラムに関する研究

論文内容の要旨

日本では2008年の中央教育審議会答申以降、大学院における大学教員養成機能（ブレFD）の強化が求められ、2019年には大学院設置基準の改正により、博士後期課程の学生を対象としたブレFDの設定または情報提供が努力義務化された。一方、研究志向型大学を中心に、大学院生の教授能力を開発するブレFDプログラムが実施されてきた。しかし、先行研究では個別プログラムの短期的成果に焦点を当てたものが多く、中期的な変容や、変容を支える要素の体系的な整理はなされていない。

本研究の目的は、ブレFDプログラムにおける参加の実態を把握し、参加者の教授能力の変容とそれを支える要素を検討し、その知見を体系化したモデルを構築することである。さらに、構築したモデルに基づき、ブレFDプログラムの設計指針を提示することを目指した。この目的を達成するために、「誰が、どのようなニーズをもって参加し、ブレFDを通じて教授能力がどのように変容し、その変容を支える要素は何か」というリサーチクエスチョンを設定し、全国調査と特定のブレFDプログラムを事例としたケーススタディを通じて、6つの研究を実施した。

研究①では、全国の大学院生を対象としたアンケート調査を実施した。その結果、ブレFD参加率は約2割にとどまる一方、大学教員志望度が高いほど参加ニーズも高いことが示された。また、参加の障壁として「時間的制約」や「研究室の方針」といった構造的要因が存在すること、複数種類のプログラムへの参加は教育能力・教師効力感の高さと関連していることが示唆された。

研究②～④では、大阪大学「未来の大学教員養成プログラム」（FFP）を事例として、プログラム参加中から修了直後にかけての短期的な変容を検討した。研究②では、段階的に学ぶプログラムへの参加により教育能力の自己評価が累積的に向上することを縦断的調査により確認した。研究③では、参加者が作成したシラバスの分析を通じ、学習目標の表現が抽象的な理解から評価可能な行動目標へと変化し、学習者中心の視点への転換が図られていることを示した。研究④では、90分の授業実践経験により、授業イメージが「形式的で静的」なものから「双方向的で動的」なものへと質的に転換することを示した。これらの短期的変容を支える要素として、段階的な学習、ピアレビューやフィードバックを伴う経験学習、真正な授業実践、リフレクティブ・コミュニティの存在が抽出された。

研究⑤～⑥では、プログラム修了後から大学教員着任後にかけての中期的な変容を検討した。研究⑤では、FFP修了後に大学教員として着任した者へのインタビューにより、ブレFDでの成果物が就職活動において活用されていること、着任後の教授活動においても学んだ知識や技法が転移していること、自律的かつ継続的に能力開発に取り組んでいることを確認した。研究⑥では、修了者による学生支援活動を事例に、ブレFDで獲得した教授能力が教授場面を超えて社会関与活動へも拡張されていることを示した。これらの中期的変容を支える要素として、学習課題の真正性、内省的な学習経験、異分野の参加者との交流、修了生ネットワークの存在が抽出された。

以上の知見を統合し、ブレFDを通じた大学院生の教授能力の変容とそれを支える要素を体系化したモデルを構築した。本モデルは、従来のブレFDが主眼としてきた教授学習に関する学習の前後に、参加前の動機づけと、参加後の社会化を位置づけ、ブレFDを時間的・領域的に拡張して捉える点に特徴がある。具体的には、第1フェーズ（参加への動機づけ）、第2フェーズ（教授学習に関する学習）、第3フェーズ（大学教員の職務の統合的理解）、第4フェーズ（アカデミック・コミュニティへの社会化）の4つの局面から構成される。さらに、このモデルに基づき、ブレFDプログラムを設計するための9つの指針を提示した。例えば、プログラムの価値の可視化と発信、段階的かつ真正な学習課題の設計、大学教員の職務を統合する内省的機会の設定、修了者ネットワークによる継続的支援などである。

本研究の学術的意義としては、ブレFDにおける大学院生の変容を時間的および領域的に拡張して捉えるモデルを提案した点が挙げられる。また実践的意義としては、参加の促進から継続的な支援までを包括的に網羅する設計指針を提示した点が挙げられる。今後は、複数の大学の多様なブレFDプログラムを対象にモデルの妥当性を検証することが求められる。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (根 岸 千 悠)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	西森 年寿
	副 査	准教授	後藤 崇志
	副 査	教授	村上 正行
	副 査	教授	藤川 信夫

論文審査の結果の要旨

本論文のタイトルは「大学院生を対象とした大学教員養成プログラムに関する研究」である。

まず、筆者は、いわゆるプレFDについて日米の展開と研究動向を整理し、プログラムを通して、模擬授業や教育実践研究の計画立案など、多様な学習経験を通して大学院生の教授能力に変容が生じることが報告されてきたことを確認している。一方、プログラム参加前の大学院生の背景や非参加者との比較といった基礎的な知見、中長期的な視点からの変容に関する分析、そしてその変容を支える要素の整理といった点の不足が課題として残されていると論じる。その上で、本論文の目的を、我が国でのプログラムへの参加状況を把握し、また特定のプログラムに関する事例研究を通して、参加者の教授能力の変容とそれを支える要素を検討し、その知見を体系化したモデルを構築することとしている。

研究①では、全国の大学院生を対象としたアンケート調査を実施し、プログラムの参加率は約2割にとどまることや、大学教員志望度が高いほど参加ニーズも高いことなどを明らかにしている。また、大学教員の志望度が高い院生ほど「研究が忙しい」や「研究室の方針」といった外的要因を阻害要因として挙げる傾向があると分析している。さらに、複数種類のプログラムへの参加が教育能力・教師効力感の高さに関連していることを見出している。

次に、研究②～④では、大阪大学のプレFDプログラムを事例として取り上げ、プログラム参加から修了直後にかけての短期的な変容として、プログラムへの参加による教育能力の自己評価の変化、シラバス作成を通じた授業設計能力の変容、授業実践を通じた授業イメージの変容を検討している。さらに研究⑤～⑥では、中期的な変容として、教授活動以外の領域にどのように拡張されるかという観点で調査を行っている。

最後に、プレFDプログラムが対象とすべき時間的および内容領域を整理するモデルを提示し、本研究で得られた知見をもとに、プログラム設計の指針を示している。

以下に論文審査の評価を述べる。

本研究を通して検証されている「教授能力」には未整理な部分がある点、本研究で実証された結果は主張される設計指針の根拠として十分ではないように思える点など、いくつかの課題が指摘できる。しかしながら、研究①のような全国調査には新規性がある。また、研究②以降は、一つのプログラムの成果を多角的に検証している点で独自性が認められる。これらは、最終章で提示されたモデルとともに、今後、プレFDのみならず、大学教員の成長にかかわる研究・実践で参照されるべき質を備えていることは確かである。

以上より、本論文を博士（人間科学）の学位論文としての基準を満たすと判断する。